

最新のアルミ缶需要・リサイクル率

リサイクル協会新専務に稲林氏

アルミ缶リサイクル協会は、このほど、都内で会見し、稲林芳人氏の新専務就任を報告。続けて恒例のアルミ缶需要予測、アルミ缶リサイクル状況を発表した。

〈24年は新ジャンル減も前年並み需要か〉

アルミ缶需要の2023年は減少となったが、9年連続で200億缶超え。酒類は家飲み落ち着き、酒税改正による新ジャンルの不振がマイナス要因となったものの、価格優位性を維持したRTDが伸び

た。飲料は缶コーヒーが値上げと暖冬で鈍い動きに。24年は引き続き新ジャンルの伸びが補うと予測。飲料はほぼ前年並み。トータル前年並みと見る。10年連続で200億缶を超える見通しだ。

「リサイクル推進が成果」

23年のリサイクル率は97.5%と大きく上昇。需要が減少したが、分子となる国内循環量と輸出量が維持されたことによる。輸出量はタイが大幅減だったが、韓国が増加し全体では微増。協会が掲げる「安定的な92%以上」の目標は引き続き達成された。

水平リサイクルCAN

トCAN率も73.8%と上昇し、サプライチェーンの取り組みが加速したものの。

また「限界は近い」とさわれていたリデュース率は04年比で6.8%の軽量化と急上昇。SOT缶の胴部、缶底、ボトル缶胴部の薄肉

日本のアルミ缶リサイクル状況

アルミ缶リサイクル協会調

	22実績	23実績
消費量(億缶)	215.3	209.7
〃 (トン)	326,808	314,645
国内循環量(億缶)	162.9	164.5
〃 (トン)	248,325	247,851
輸出量(億缶)	38.4	39.1
〃 (トン)	58,471	58,891
再生利用量(億缶)	201.3	203.6
〃 (トン)	306,796	306,742
缶材向け重量(トン)	176,087	182,897
リサイクル率(%)	93.9	97.5
CAN to CAN率(%)	70.9	73.8
組成率(%)	89.1	89.4
廃棄量(トン)	2,000	2,000
未把握重量(トン)	18,012	5,903
リデュース率(%,04年比)	6.1	6.8

化が要因と考えられる。目標は25年までに6%以上、21年に達成されており、さらにハイレベルになった。神崎敬三副理事長(東洋製罐グループホールディングス常務執行役員)は「技術的にはさらなる軽量化が可能。ただ、流通で耐える設計などあらゆる面で安心、安全が担保できなければならぬ」と展望している。

「業界統一」アルミカップリサイクルマーク

また、会見では業界統一の「アルミカップリサイクルマーク」を披露。会員各社はもちろん、行政を通じて

自治体にも周知していく。近年、イベントや商業施設で増えている「アルミカップ」は「保温性への評

価が高く、今後の市場確立に期待が持てる」(石原美幸理事長・UACJ取締役会長)一方、容器包装リサイクル法による「飲料、酒類が「充填された」もの」の基準を満たさないため、アルミ缶の識別マークを使用できない。ただ、アルミ缶と同じくアルミニウム合金で作られ、リサイクル性が高いため、新たな業界統一マークで資源循環を促していく。

(石母田景)

日本の飲料用アルミ缶需要量

アルミ缶リサイクル協会調(単位:億缶、%)

	22実績	前年比	23実績	前年比	24予測	前年比
ビール系	91.2	96.9	88.0	96.5	87.5	99.4
ビール系以外の飲料	120.4	100.6	119.1	98.9	120.0	100.8
(内その他アルコール)	50.8	98.6	51.6	101.6	52.5	101.7
(内非アルコール)	69.6	102.1	67.5	97.0	67.5	100.0
小計	211.6	99.0	207.1	97.9	207.5	100.2
(内ボトル缶)	23.2	104.5	21.9	94.4	22.0	100.5
空缶輸入	0.6	66.7	0.5	83.3	0.5	100.0
実缶輸入	4.3	104.9	4.9	114.0	4.9	100.0
実缶輸出	1.2	120.0	2.8	233.3	2.8	100.0
国内需要	215.3	98.9	209.7	97.4	210.1	100.2



みなさまの身近で

くらしをささえる容器包装。社会インフラとも言える大切な役割を担っています。これまで培ってきた包装技術を基軸に総合力を活かした価値創造でさらなる飛躍をめざします。

